

映画『ナルニア国物語／第3章：アスラン王と魔法の島』



帝京科学大学教授 塩川 春彦

C. S. ルイス原作の映画『ナルニア国物語／第3章：アスラン王と魔法の島』が、本年2月に公開され、さっそく観た。『ナルニア国物語／第1章：ライオンと魔女』（2006年日本公開）、『ナルニア国物語／第2章：カスピアン王子の角笛』（2008年日本公開）に続く、シリーズ第3作である。前2作も本作も、内容的には原作の良さがしっかりと活かされた上で、優秀な俳優、お金をかけたCG、特殊メイク、衣装で、映像的にも十分楽しめる。世代に関係なく楽しめる作品である。

原作の『ナルニア国物語』（原題：The Chronicles of Narnia）は、イギリスの文学者でありキリスト教思想家でもあったC. S. ルイスの、全7巻からなる児童文学である。1950年から1956年にかけて刊行された。20世紀のイギリスの少年少女が、ライオン「アスラン」により創造されたナルニア国へ行き、与えられた使命を果たす冒険を描いている。日本でもファンが多いこの作品は、これまでに世界で累計1億部以上が売上げられているという。児童文学ゆえに平易な英語で書かれており、大人が読んで面白く読み物であるので、原書に親しむための入り口として読む人も多い。私もその一人だった。その後、自分の子どもが寝る前の読みきかせに改めて読んだが、子どもとともに再び楽しんだ。

今回の第3作は、『朝びらき丸 東の海へ』の映画化で、前2作の時より頼もしくなった主人公の少年と少女が、いとことともにナルニアに戻り、カスピアン王とともに東の海を目指して航海し、さまざまな不思議な島・出来事に会う物語である。

『ナルニア国物語』は聖書の物語を思い起こさせるキャラクターやエピソードが散りばめられている。ライオンのアスランはキリスト（あるいは創造神）のメタファである。どの作でも、主人公のうちの誰かが、支配欲、金銭欲、虚栄心、エゴなどを刺激する誘惑に負ける場面があり、これが物語の上で重要な意味を持つ。これは、“罪を犯す人間”のメタファである。『ライオンと魔女』では、創造主であるライオンのアスランが罪を犯した人間のため

に、自分の命を投げ出す。これは、人間の贖罪のために十字架にかかったキリストのメタファである。一方で、人間は“誘惑に弱く罪を犯す”が、その人間が他者のために自分を捨てようとする時に、救いが訪れる。さらに物語では、聖書と同様に、「予言」が大きな役割を果たす。魔女の支配が打ち破られる条件の予言、ナルニアの解放と救い主であるアスラン到来の予言、カスピアン王に関する予言、4人の兄弟姉妹が王になる予言、裏切りの贖いに関する予言などである。

今回の映画『アスラン王と魔法の島』では、聡明で頼もしくなった少女ルーシーや少年エドモンドでさえ、誘惑に負けたり、弱さを出したりする。ルーシーは見かけの美しさへの誘惑に負け、一瞬自分を見失う。エドモンドは恐怖心におずかに取り乱し、それが困った事態を引き起こす。理屈は立つがエゴ丸出しのいとこのユースチスは、大きな過ちを犯すが危機において犠牲的精神を発揮するという、今回の物語の最重要の登場人物である。小さいネズミのリーピーチーブが最後に、永遠の国を暗示するアスランの国へ行くことを許されるのは象徴的である。

『ナルニア国物語』は、このように聖書的な教えや教訓を象徴や寓意で表現している^(注)が、まったく説教くさくなく、過ちを通して一回り大きくなっていく少年少女の成長譚として、幻想的な冒険譚として楽しめる。

(注)『ナルニア国物語』はC. S. ルイスが子どもに向けてキリスト教の基礎を神学用語を使わずに書いた小説と言われるが、ルイス自身は、それは結果論であって、キリスト教的な教えを伝える手段としてファンタジーを書いたわけではない、と述べている。ルイスは、まず、フォーン（半人半獣）、女王、偉大なライオンなどのキャラクターを構想しながら、ファンタジーとして物語を書き始め、キリスト教的な考え方は、あとから自然に物語に織り込まれた、と後に書いている。